

平和文化研究 第40集 (2019年5月)

シンポジウム 都市の記憶 III

江戸町の現状

三瀬清一郎

長崎総合科学大学

長崎平和文化研究所

江戸町の現状

三瀬清一郎

上菌：李先生ありがとうございます。町の賑わいの中にある歴史記憶装置としての旧長崎警察署、そして県庁跡地ということをやはり考えなければいけないと思います。李先生は李先生でこのようにしたらいいんじゃないかということをおっしゃっていましたが、皆様の方もあとで感想の用紙がありますので、どうしたらいいかを書いていただければありがたいと思います。3番目に、当の江戸町は何を考えていらっしゃるのかを、三瀬さんよろしくお願ひいたします。

三瀬：皆さんこんばんは。今日は寒いなかたくさんの方にお集まりいただいて。やはり県庁の跡地は今長崎の皆さん方の一番の関心事ではないかと思っています。私は先ほど紹介いただいた江戸町商店街のお世話をしているので、商店街の皆さん方の意見を踏まえながらどのように我々が考えているか、お話しさせていただきたいと思っております。私は学者ではありません。ただ肌で感じたことを、直に感じたことを皆さんに申し上げ、一緒に考えていただけたらと思っております。

県庁が移転してちょうど一年経ちます。それで県庁の跡地はどうなるのかということをご皆さん方もよく質問されますけれども、私自身もわかりません。今一番変わったところをいいます。毎年商工会議所が通行人調査というのをやるんです。これは昨年7月に2日間やってもらいました。定点観測です。前年度の平成29年に調査してもらった時の数字と、昨年県庁が移転したあとの数字の比較ですけれども、60パーセント減ったんです。そもそも県庁には職員、県警の職員、合わせて二千人超えるぐらいのメンバーがおられました。江戸町の商店街にはレストランとか食堂が結構あるんです。今までは二千何百人の利用していた方たちが魚市の方に行ってしまったから結局ゼロになっています。これは大変だということが皆さんもおわかりになると思います。これが現状です。今まではお昼を県の職員たちに利用してもらっていましたが、結局昼の利用がもう全然ないわけで各レストランや食堂は、昼はもう止めちゃって、夜にアルコールを出すほうに変わってきているわけです。そういうわけで町全体の昼間の通行人も減り、それから月曜日から金曜日まで県庁に勤務していた人たちが全くゼロになったので、閑散としているということご皆さん方もおわかりになると思います。これを我々はどうするかということで色々考えますけれども、なにせ一番核になる県庁が魚市場跡に行っているもんだから、私たちとしてはどうすることもできないわけですね。だから我々は今日皆さんにお集まりいただいて、江戸町商店街のことを言えば「お前たちの勝手じゃないか」と言われますけれども、要するに町の衰退にも関わってくるわけです。町の衰退に関わるということは地域の衰退にも関わってくるわけです。そういうことで今日はちょっとお話をさせていただこうかと思ひ立てさせていただきました。

やはり町づくりを考えるなかで、どうしてもこの県庁跡地というのは今まで先生方が歴史のなかでずっとお話をされてきたように長崎の超一等地です。ここが今のところずっと空地になっているのです。そ

これは長崎県庁舎が魚市場に移る時でも跡地は速やかに考慮しますということを当時の知事がおっしゃっているわけです。それがどうなるのかということが、返事が全然、ビジョンも何も私たちは聞いていない。昨年の年末の県議会本会議で、ある議員が「県庁の跡地はどうなるんですか」という質問をした時に知事はようやく腰を上げて関係者、有識者のお話を聞いて、先ほど李先生がおっしゃったように芸術ホールとかを造りますというお話があったわけですね。それよりも我々が一番望むのは地元の意見をまず聞いてほしいというのが一番の願いです。何のための県会議員さんであるか、有識者であるか。5、6年前だと思いますが県庁舎跡地懇話会というのがあった。これは2年間ありました。結局何も決まっていないうんです。こういうのが一番いいだろうということで結局この前発表があったのは芸術ホール、文化ホール、そういうハコを造ることが一番望ましいのではないかという意見が出ます。我々はなぜ芸術ホールや文化ホールがいいのか、私たち地元にしても市民の皆さんにしても、なぜいいのかというのはおそろくわかった方はいらっしゃらないかと思います。例えば芸術ホールあるいは文化ホールを造って毎週催し物をやる、考えようによっては毎週あるかないかというのはまたこれ疑問ですね。その証拠に、長崎ブリックホールがありますね、そこにはレストランがあった。今ないんです。なぜかという、要するにブリックホールでも稼働率が悪いということです。今はたまたま会場がブリックホール一か所しかないからあそこはすごく競争率が激しいです。それでもレストランはないんですね。だから例えば県庁舎跡地に芸術ホールや文化ホールを造っても毎週催し物があるかは全く水物です。だからそういう物は私たちも欲しくないと。ちょっと話を今から75年前に戻します。戦時中、特に江戸町や築町は県庁舎を残すために周辺の建物は全部強制疎開にあったんです。これは皆さんもご存知の方がいらっしゃると思います。県庁舎が残るといって、国家権力でもって強制疎開をさせられたんです。挙句の果てには負けて、それで原爆を落とされた。その時幸い江戸町や築町は犠牲者が出ていないんですね。なぜかという、建物が全部強制疎開させられたから人が住んでいなかったんです。そのように私たちは犠牲まで払わされてるんです。だから今度ぐらいは我々地元の意見でも聞いてくださいよと言いたい、というのが私の気持ちなんです。それで今考えてみたら、長崎市というのは町の中心部が北部の方に移っているんですね、考えてみたら。長崎駅前を中心としたアミュプラザやココウォークとか、どちらかというとも北部の方にウエイトが移っています。それからもう一つ長崎県のことを考えると、これも県南から県北に移っていると私は考えているんです。というのはまず県庁所在地にある県立図書館を大村市に持っていくでしょ、結局大村市の方に取られているわけですよ。それから二番目に言えることは長崎市に本店がある銀行です。何とかの合併で佐世保市にある銀行の方に吸収されるでしょ。それと佐世保は今16万トンの船が停泊できるような大きなバースを造っています。今長崎は観光、観光と言うけれどもだんだん右肩下がりになっています。県北が今しっかり頑張っています。そんなことで長崎県の中心も北部の方に移りつつあるという、すごく崖っぷちに立っているわけです。これをやはり何とかするためにはこの県庁の跡地に、町おこしの原点として我々は何かを造らないといけません。

それで長崎市という所は考えてみると大浦南部に天主堂を中心とした、グラバー邸とか南山手の観光地。そして北部は原爆の公園を中心とした平和に関する施設。その中間を結ぶ接点としてやはり長崎県庁の跡には何かを造ってくれと。それで先ほど意見があったように大きなハコ物では柔軟性がないですね。建物が特化されていますから、私は月曜日から金曜日、あるいはもう365日人が集まるような施設を造る。そこには長崎県のいろんな県産品などを集めた一つの物産館を造る。今長崎の駅前に物産館というのがあるでしょ、あれは意外と知らない方が多いですね。それから長崎県は皆さんご存知のように、日本

でも第二位の漁獲量があります、魚の水揚げ量は日本で二番目なんです。北海道の函館なんかに行けば朝市というのがあります。長崎はこれだけ日本でも二番目の漁獲量があるのにそれを全然生かすような場所もない。一方大浦とグラバー邸と浦上との中間点ですからやはり歴史を生かした例えば、くunch資料館とかそういう物を持ってくるとか、あるいはいろいろ考えればいろいろな物を置けるので、皆さん方も何がいいかという知恵があるかと思えます。一番いけないのは県や市が住民の声をなかなか聞いてくれない。私たちにも、何年前かに県庁が移転する前に、公聴会があったんです。結局もう決まってしまったあとに一応公聴会というのをやるんです。それで悪い言い方かもしれませんが帳面消しをしているわけなんです。だからもっと我々は地元の声を聞いてもらえるような、我々地区の住民の人たちに目線を合わせたような行政の仕方をしていただきたいという気持ちです。100人集まればおそらく100のアイデアが出てくると思えます。その集まったアイデアをふるいにかけて、そのなかからエクスだけを取ってきてやるのが行政の仕事ではないかと私は思うんです。それがなかなか実行されないですね。選挙が始まる時には必ず頭を下げて来られますけれども、終わってしまえば頭が高くなられて。これは正直な話かも知りません。結局地元の意見をとにかく聞いてくれというのがほとんどの皆さん方の声です。有識者の話を聞いたとか、関係筋の話を聞いたとか言いますけど有識者というのは全くあてになりません。有識者よりよっぽど地元の人の方が知っています、地元のことは。先ほども言ったように75年前には強制疎開を国家権力でやられています。だから長崎の町の町づくりはどのようにしたら一番いいかというのは地元が一番知っています。これが私が一番皆さん方に申し上げて、いろいろ皆さん方と一緒に進めていきたいと思っているわけです。やはりこういうことはアクションを起こさないといけないわけです。とにかく行動を起こさないといけないわけです。行動とは何かというと種を撒かないといけないわけです。種を撒けば必ず芽が出るんです。だから今すぐ撒いて芽は簡単に生まれませんが、そういうのは皆さんで共通の意識を持っていただいて、そしてそれをまた行政に届くようなことでいろいろ皆さん方と一緒に考えていけば、それこそ鎖国時代に栄えた長崎が必ずよみがえってくると私は思います。やはりそれぐらいの意気込みでいかないと、行政は言っても全然聞かないですよ。それで話をすればいろいろ皆さん方から意見を聞いたと言うけれども、とにかく地元の人を目線に合わせた行政をしてもらいたい。そしていろいろ広く意見を聞いてもらいたい。江戸町商店街も今苦戦しています、いかにして人通りが増えるか、あるいは町が賑わうか。江戸町は何回も申し上げているように南の大浦地区と北部の浦上地域との丁度接点になるわけです。ある人も極端な言い方をしました、旧県庁舎跡地にバスの発着所を造ったらどうだろうかとか、あるいはバチカンに相談してここにすごいサグラダファミリアのような物を造ったらどうだろうかとか、いろいろな意見も出てきます。それはちょっと待つかんねと。やはりお互いに話し合っただけで話をすれば、何かそのなかに良い意見があるのではないかとというのが皆さんの気持ちなんですね。そういうわけでとりとめのないような話になりましたが、ありがとうございました。

上 菌：全然とりとめないということではなくて、地元の声を聞いてくれというこの一点はすごかったと思います。江戸町と共に強制疎開の憂き目にあって、そしてじつは築町あたりも下を掘るといろいろな物が出てくる。その歴史記憶も遺産として非常に大きいのではないかとということで、築町の中嶋さんよろしくをお願いします。